

企業研究の重要性

浦川 春樹 (Haruki URAKAWA)

長崎国際大学大学院 薬学研究科 医療薬学専攻

私は現在、長崎国際大学大学院の博士課程1年生です。学会というものに参加したのは、学部生時に指導教員である佐藤博先生に韓国で行われる国際学会に同行させて頂いたのが初めてでした。今思えば、最初に参加した学会が国際学会という幸運に恵まれ、その経験は私自身の考え方に大きな影響を与えてくれました。学会という単語のみを知っている状態で実際に現地に行くと、大学だけではなくその他の研究機関の方が多く集まっており、現在の研究における成果等を発表されていました。その際感じたのは、学会というのは単なる研究発表会の場ではなく、親睦を深め、時にはこれまで自身になかった他方面からの視点や新しい協力者との出会いの場であるということです。それと同時に、企業の方が発表されている現場を見て、これからの時代、企業自身が研究を行い企業自身の価値を高めていかなければ、生き残ることが難しく成長は見込めないと感じました。

話は大きくなりますが、日本における研究費用の多くは企業が79.8%（2020年時点）を占めており、アメリカ、中国においても共に70%を超えており、企業の研究が重要であるかが伺えるデータとなっています。

冒頭の自己紹介では書きませんでしたでしたが、私は大学院生であると同時に、在学時（当時6年生）に地元の佐賀県伊万里市で介護施設を始めました。2022年4月に開所し現在では職員約20名となり少しずつ成長しています。介護施設というのは昔から所謂3K（きつい・汚い・危険）の代表格とされていました。しかし視点を変えて見てみると、そこには多くの改善点があり成長が見込めると考えています。現在弊社では、その3Kの解消に努めており、中でも研究においては汚い（臭い）に着目し、他社にご協力頂き研究を始めています。以前から介護臭というのは問題ではありましたが、現状を見てみると改善されているとは言えず、それぞれの施設で対策し

ているにすぎません。中には、根拠のない対策も見られます。介護施設で重要な事は先ほどの3Kの中の危険を減らしつつ問題を解決するという事です。私は学部生時、光触媒をテーマに研究を行っていました。現在、研究に使用させていただいている製品は光触媒を用いた小型の空気清浄機で、特徴は500mLのペットボトルよりもわずかに小さい位のサイズでありながら、従来の空気清浄機と同等の効果があることです。コンセントに直接差し込むので、車いすや歩行時の邪魔にならず転倒リスクが低い為にこの製品を選びました。また、その他にも安全性の高い職場環境改善策を考えていきたいと思っています。

末筆にはなりますが、今回、室内環境学会の一員となったことで会員の皆様の様々な研究や活動に触れる機会を得られることを楽しみにしており、また、後世に微力ながら尽力したいという思いが湧いて来ました。

室内環境学会と会員皆様のご発展を願っております。



著者の学会での発表の様子